われらの文学

19

開高健

Ken Kaiko

開高健

Ken Kaiko

この文学 19

編集＝大江健三郎／江藤淳

講談社

Ken Kaiko

われらの文学　19　開高　健

定価＝四九〇円
昭和四一年六月一五日第一刷発行
昭和四二年九月二五日第二刷発行
著者＝開高　健
発行者＝野間省一
発行所＝株式会社講談社　東京都文京区音羽二ノ一二ノ二一
電話　東京（九四二）一一一一（大代表）振替東京三九三〇
印刷所＝大日本印刷株式会社
製本所＝加藤製本株式会社

©講談社　昭和四一年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan

目次

日本三文オペラ　5
ロビンソンの末裔　170
パニック　346
裸の王様　382
流亡記　430

471 私の文学＝開高健
478 解説＝いいだ・もも
494 略年譜

装幀＝細谷巌　巻頭写真撮影＝野上透

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

開高　健

日本三文オペラ

第一章　アパッチ族

「外では雨が降っている！」
「ところが頭の上では
小屋が燃えている！
焼け死ぬことを思えば
濡れねずみになるぐらい
なんでもない」
――ビオニールの歌――

一

あとで仲間から〝フクスケ〟と呼ばれるようになったひとりの男がすこし酔ったような足どりでジャンジャン横町を歩いていた。見たところは大きな男だが、すこし猫背で、穴のあいた水袋のように筋肉が骨のうえでたるみ、すっかり弱りきっていた。眼は乾いてどんよりかすみ、重そうな顎をたらし、紐のないかたちんばの靴をひきずっていた。例によって、ボロ切れ、空罐、藁のかたまり、ボール紙の切れっぱしなどといった、すっかり正体のなくなったものを背負いこんでいる。歩くところを見ると、まるでちょっとした塵芥山の移動である。さすが不潔好きのジャンジャン横町の連中も、この男がやってくるのを見ると、眼をそむけた。職業はもちろん、家、子供、女房、道具、名前など、あらゆる属性を失ってすでにひさしいということが一瞥してわかった。悪臭を発する都会のひき肉とでもいうよりほかに言葉が見つからない。どんな子宮からしかめつらで這いだしてこうなったものか、さっぱり見当がつかない。むだなことは、まるで町工場裏の空地の、一年じゅう乾いたことのない、白内障でつぶれた眼のような水たまりにも似た男である。それが鉢のひらいた、子供くさい頭をして、ジャンジャン横町のもうもうとした匂いのなかでふらふらしていた。

ジャンジャン横町というのは大阪の「新世界」という場末の歓楽街にあるせまい路地である。ちかくには美術館と動物園という、似たようなものが二つあるが、この豊饒ではじしらずな町にはなんの影響もない。新世界そのものは、美術館のある丘のしたにひろがった、むらむらとした湿疹部、または手のつけようもなくドタリとよこたわった胃袋とでもいえるようなところだから、ジャンジャン横町はそれにつづく腸管みたいなものである。フクスケはその腸管のなかを流れる青い夕靄の川のなか

にただよっていた。こと二、三日、彼はなにも食っていなかった。彼のねぐらは胃袋の入口にあたるような、動物園の植込みのかげにあった。そんなところに寝起きしながら干されるというのはすこし妙な気がするが、事実であった。軒なみ何十軒と数知れぬ飲食店をまえにしても、また、そこにウンカのような通行人の群れがあっても、一度なにかが狂いだすと豆一粒食えぬというのはしばしばありがちなことだ。恐慌の気配をかぎつけると、フクスケは何度となくねぐらからでて新世界へ入っていき、ジャンジャン横町へもぐりこんでみた。塵芥箱、残飯山、哀訴、門附け。胃袋から腸へ、腸から胃袋へと、内側をつたってだめなら外側へまわり、外側がだめなら東西に歩いてみる。それで効果がなければ今度は南北へ、ときには縦に、ときには横にと、おちつきのわるい不消化物のようにうろつきまわったのだが、さっぱりききめがなかった。こんなことはいままでに何度もあって経験はいやというほどつんでいるし、飢えというじゃじゃ馬のあしらいかたにもかなりの自信があったので、はじめのうち彼はかるく見ていた。あわてることはあるまい、と思った。ところが、夜、ねぐらにもぐりこんで、暗がりのなかでいざ相手にまわしてみると、たいへんな強敵だということがわかった。今度の奴は妙にうぶで、しつこく、そのくせコソコソと技巧的なところがあった。いきなり背骨のふるえそうなたまらなさでかみつくかと思うと、とつぜんはなれていなくなり、油断をしていると今度はいつのまにか皮膚のなかへもぐりこんで石のようにズシリともたれかかってくる。おしのけようとしてもがきにもがいていると、つぎにはふいにめまいや吐気となって霧のなかへ追いこもうとする。相手は余裕綽々とかまえているらしくて、そんな直撃や居坐りや煙幕などの正面攻撃のさいちゅうにときどき風のように擦過する熱さや川のようなけいれんなどの側面攻撃もまじえるのだ。汗がでて、眼がちらついた。フクスケは暗がりで体をまげたり、のばしたり、とつぜん起きあがってまた寝てみたり、思うまい思うまいと思ってみたり、逆にありとあらゆる皿と湯気を思いおこそうとしてみたり、必死になって悪戦苦闘したが、むなしかった。夜があけるころには、すっかりぼんやりしてしまった。公衆便所へ水を飲みにいこうと体をおこしたときには、まるで腰まで粘土に埋没していたような気がした。彼は水を飲んで帰ってくると、日なたに這いだして、厚いかさぶたのような垢とあぶらに蔽われた、薄暗い体のなかにとじこもってうつらうつら眠った。夕方ちかくまでそうやって土と日光のなかに半溶状態でいたのだが、へとへとに疲れてよこたわっていると、そのうちになんだか、孤独や斃死という、シラミのように慣れきったはずのもの

が妙にドキドキした新鮮さで芝生や公園のなかをかすめて通るように思われだしたので、彼はふらつく足を踏みしめ新世界へ入っていった。

夕暮れの上げ潮にのっていつもの連中がいつものようにこの多汁質な湿疹部をめざして集まり、ぞろぞろ歩いていた。「すべてこの世は響きと怒り」というせりふはシェクスピアだったと思うが、フクスケに教えてやりたいようなものである。この、新世界とジャンジャン横町というところは、まさに、年がら年じゅう夜も昼もなく、ただひたすら怒って騒いで食うことにかかりきっているようで、栄養と淫猥がいたるところで熱っぽい野合をしていた。娼婦、ポン引、猥本売り、めちゃな年頃の大学生、もの好きざかりの中学生。ヒロポンの切れた三白眼。ばくちに負けた奴。ひとの財布を狙う奴。頭にいっぱい淫らな幻想のかけらをつめこんだ工員。毛のついた内臓を生のまま頬張る人夫。なにやかやらが血と精液の充満したぼうふらの群れのようにひしめきあっている。ニタニタ笑い、コソコソささやき、ギラギラにらんでいる。

フクスケは道のはしを軒づたいにうなだれて歩いていった。ホルモン、すし、ライスカレー、どった煮、おでん、あめ湯、大福餅、天ぷら、シュウマイ、酒まんじゅう、やきとり、カツ丼、かば焼き、にぎりめし、みそ汁、刺身。たがいにおしあいへしあい腫物のようにかさなりあい、くっつきあって、いっせいに匂いをもうっと吹きつける。思わず藁みたいにふるえると、麻雀屋の窓でけたたましく陰惨な声が「食うてこませ！」と叫んだ。映画館の銃音。すし屋の大太鼓。パチンコ屋の軍艦マーチ。廃兵の君が代。そこへ拡声器を切符売場へもちだした劇場からは女のアクメのうめき声がたちのぼって町いっぱいにみちわたるのだ。もうすぐすればあちらこちらの壁に裂けめや穴のひらくのが見えるだろう。腸管は充血して酒精の熱い濃霧のなかでゆがみはじめるにちがいない。

はじめのうちフクスケは一軒ずつ店のまえでたちどまり、眺めたり、かいだりしていたが、そのうちにやりきれなくなって方向転換をした。彼は川のなかの石のようなものだった。せまい路地には身うごきならないくらい群衆がひしめいていたが、さすが不潔で旺盛で物好きな横町の連中も彼の体からたちのぼるねばねばした悪臭にはたまりかねて、みんな体をさけ、彼がのろのろと通りすぎるのを道のはしで待った。フクスケは眼がかすんでいたのでそんなことはまったく知らず、こんでいるわりには歩きやすいじゃないかと思いつつ、あいかわらず塵芥山のようにうごいていった。ジャンジャン横町をでると新世界に入ったが、そこの空地には「性犯罪衛生大展

覧会」というむしろがけの小屋があった。フクスケは入口に貼りだされた何枚かの写真をぼんやり見あげた。女を殺したうえにバラバラにして髪をそっくり剥ぎ、山小屋へかけこんでそれを頭からひっかぶってゴム長はいたまま首を釣った男だとか、なんだとか、とほうもない情熱の持主の写真であったが、いずれも何回となく複写して現像したものらしく、ただもやもやと黒いものと白いものが映っているにすぎなかった。強姦された女の裸の現場写真も一枚まじっていたが、局部には絆創膏が貼られて見えないようになっていた。フクスケが眼をちかづけてこまかく観察すると、あきらかにそれをひっ剥がそうとしたらしい爪の跡がいくつもついていて、絆創膏は手垢によごれて薄黒くなっていた。フクスケはのろのろと手をあげ、ヤットコみたいにのびてまがった爪で剥がしてみようと一、二度試みたが、剥げそうになかったので、すぐあきらめた。この小屋にはほかにもっとおもしろいものがあるように思えたが、入場料の十円がなかったので、すぐはなれた。

それからフクスケは鋪道のぬかるみからしみだした影のようにゆっくりとうごきつつ、煮こみかカレーライスの大鍋のなかであぶらの泡が浮いたり、沈んだり、重いためいきついたりするのを眺めて時間をつぶそうかと思ったが、いまの体ではそんな刺激は

（ごつすぎて……）

とてもたえられないような気がしたので、あきらめることにした。

ほかになにか飢えをまぎらすものはないかと思ってとぼとぼ歩いていると、ある人けのない路地の暗がりに二、三人の男がしゃがみこんで、クスクス笑っていた。ぼっと明るくなったかと思うと、すぐ暗くなる。その明滅のたびに

「さあおしまい」

「もう十円」

というような声がして、また明るくなる。八卦見でもなければ猥本屋でもなさそうだ。が、女の笑声が聞こえて

「あっちっち、もっとはなしいな、火傷するがな」

といったので、フクスケは

（また、やっとおる）

と思った。いままでに何度もかいま見て彼は女のそれがどうなっているかということをよく知っていたが、やっぱりのぞきにちかづいていった。この界隈ではそれを〝マッチ一本〟と呼んでいた。やっぱりひとりの男が食うに窮して、これまた飢えとつるみあっていた女をひとりさがしだしてきてはじめた商売である。彼と彼女は徳用マッチ一箱だけをもって、毎夜、町にでた。彼らは後

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

暗くて襞の多い新世界のなかでもいちばん暗くて忘れられた場所を選びだして、およそこれ以上落ちようのない簡単な仕事をやっていた。

フクスケはこっそりちかづいた。塵芥箱のかげの、むんと悪臭のたちこめた暗がりにひとりの中年の気ちがい女が寝ころんで膝をたてていた。客の酔っぱらいがマッチをすってちかづけると、黄いろくたるんだ二本の腿の奥に蟹の鋏が見えた。それは腐りきって変色し、だらりとひらいて、どこまで通じているのかわからないような暗い穴があいていた。酔っぱらいは体をぐらぐらさせ、十円だしてはマッチをすり、マッチが消えるとまた十円だす、というようなことをつづけていたが、彼は目的のものをちっとも見ていなかった。会社帰りの仲間らしい男たちが、マッチをゆらゆらさせている彼の手をつかまえてジッと虫食いだらけの古い果実を照らしださせようとしたが、いつも、やっとつぶさに眺められるかというときになって火は消えた。男たちは舌打ちし、女はゲラゲラ笑った。マッチがつくたびに争いあって、小さな、深い洞穴のなかへ首をつっこもうとあせる男たちのうしろから、フクスケはなにげなくのぞこうと首をのばした。が、その瞬間、いきなり

「ただ見するな！」

低い、殺気にみちた声が走って、フクスケはつきとばされた。男の顔を見ると、いまにもつばを吐こうと口のなかで舌をうごかしているらしい気配があったので、フクスケはよろよろともつれそうになりながら逃げだした。男はすぐ仕事にもどったらしく、

「……家へ帰ってよう研究してみなはれ。しろうとの奥さんはこんなことになりまへんよってに、こら、ええ勉強でおます」

などという声がうしろで聞こえた。

しかたなしにまた腸管へもどろうかと思って映画館のまえの明るみへ這いだしたとき、ひとりの女に肩を叩かれた。

「兄さんよ」

女はいやに慣れ慣れしい表情でニヤニヤ笑っていたが、しばらく歩いて話を聞いているうちに、それは女が彼のあとをいままでずっとつけてきたからだとわかった。女は彼がジャンジャン横町のホルモン屋のまえでおよそ三十分は煙にいぶされていたことや、犯罪写真の絆創膏を剥ごうとしたことや、のぞきにしくじってどなられたことなど、ひとつひとつこまかく数えたてた。フクスケが見ると、女はほぼ中年と思われる年配で、男物のくたびれたワイシャツをスカートのなかにつっこみ、草履のように薄くなった下駄をはいていた。眼と眼のあいだが平日のようにひらき、瞼はするどく切れて、頬骨が

とびだしている。ひと目で朝鮮人とわかった。目じりには皺がたくさんあってこれまでの苦闘をしめしているが、ひくい鼻や、がっしりした肩や、つよそうな首、小作農民系のこすっからさをうかべた眼など、どの点をとっても、どのような時間のヤスリにもたえられそうな、丈夫一式という印象で、胴の長い、すわりのよさそうな体つきはいかにも子供をたくさん生みそうであった。フクスケは、なんとなく、この女はまたいだだけで妊娠するのじゃあるまいか、と思った。ナイフのようにするどいニンニクの匂いが女の体から発散していたが、むしろフクスケはそれを好ましいものに思った。

女は、しばらく、ずけずけとした口ぶりで楽しそうにフクスケの弱点を数えたてていたが、そのうちに、なにを思ったのか、彼の顔をのぞきこんで

「兄さん、なにが食べたい」

と聞いた。

口ぶりでは彼女がほんとになにかふるまってくれそうな気配が感じられたので、フクスケは、よく考えたあげく

「煮こみとモツ丼」

と答えた。どちらも新世界ではいちばん安くて、口にあい、フクスケの感じたところではいちばん力がつきそうに思えるものであったが、女は掘立小屋に入って彼が凸凹になったブリキの皿でがっつきはじめたのを見ると、いかにも軽蔑したように

「ぜいたくや」

といった。店で食わせるものではそれ以下のものがないと思いこんでいたフクスケは、女の言葉にちょっとおどろいたが、とにかく空腹はせっぱつまっていることだし、おごってもらっていることではあるし、なにもいわずに臓物をかきこんだ。

女は彼が食事をすませるのを待ってから、用件を切りだした。彼女は家畜の臓物のあぶらにまみれてほとんど文字盤がかすんでしまったような柱時計を見あげて

「どうやな、兄さん」

といった。

「十時から仕事があるんやが、助人に来てくれへんか？」

フクスケはちょっとがっかりして、あきらめたようにつぶやいた。

「……そら、そうやろな」

「なにがいな？」

「ただでは食えんわ」

女は間のわるそうな表情でちょっとだまったが、すぐに自信を回復した。

「金はだすのやで。それに飯もでるし、服も貸すし、な

んなら寝ていってもええちゅうのやが、どうや？」
「えらい、ええ話や」
「ええ話や」
「よすぎるがな」
「……」
「場所はどこや」
「城東線の京橋や」
「仕事はなにや」
　ふいに女の顔をある表情が走って消えた。女はそっぽをむいて、だまりこんだ。が、すぐに気をとりなおしたようにむきなおって、ニヤニヤ笑い、フクスケの肩や腕をじろじろ眺めながら
「兄さんならでけるこっちゃ」
　といった。その言葉にはつよい確信が感じられたので、フクスケは、なにかわからないまでも、とにかくこの女は思うにはじめからそれだけを点検しながらあとをつけてきたのだろうと考えた。彼は煮こみとモツ丼が腹に入ってすっかり気持がよくなり、耳のうしろがザワザワと温くなりだしたのにうっとりと酔っていた。女の微笑はどことなくこすっからくて、仕事のことはそれ以上ひとことも言うまいという緊張がありはしたものの、暗さやするどさがないようだったので、しばらくだまっていてから
「仕様ないな」
　と、つぶやいた。

二

　フクスケと女は新世界のモツ屋からでると、公園をぬけて坂をのぼり阿倍野橋にでた。城東線の高架線はそこから出発して大阪の下町をつらぬき、大阪駅で終点となる。二人はそこからのって、京橋でおり、駅のちかくの貧民部落へ入っていった。鹿芥山のようなフクスケがどうして電車にのりこんだのか、よくわからない。天王寺でのりこむときは、女はひとりで改札口をとおり、プラットホームで待っていた。すると三十分ほどしてフクスケがどこからともなく線路を歩いてきて、プラットにあがった。電車にのるときは車掌に見えないよう、女のかげにかくれてよろよろとかけこみ、のりこんでしまうと乗客から遠くはなれて、運転室のちかくの隅っこの床へ油布のかたまりのようにしゃがみこみ、生きてるのか死んでるのかわからないぐらいに頭も足もかくしてしまった。京橋につくと、また女のかげにかくれてプラットへ這いだした。女が改札口をでて待っていると、今度は十分ぐらいで、どこをどうまわったものか、駅とはまったく反対の方向の町のほうからぶらぶら歩いてきた。べつにどうやったのだとも問きあわないで、二人はそのまま

貧民部落へ入っていった。

この部落は、大阪駅から電車で五、六分かかるかかからないというようなところにあった。が、ネオンと酒場と劇場のアミーバー的な東方的殷賑にそれほどちかく接していながら、まったく農村のようであった。だいたい城東線の沿線の町は、寺田町、鶴橋、猪飼野、玉造、森宮、すべて大阪の低湿地帯で、中小企業の町工場や朝鮮人町が集結しているところである。このあたりは、どこを歩いても、いたるところで下水溝が泥や米粒の嘔吐をもりあげ、道を緑いろに腐らせている。ところが、フクスケがなにも知らずにひょろひょろ入っていった部落は、その低地性、貧窮、陰湿さ、ゆきあたりばったりの、まさに精悍そのもののようなところであった。

家は何軒かわからない。おそらく何十軒というぐらいのものだろう。あまり大きな部落ではない。が、それらの掘立小屋は夜のなかでくっつきあい、つるみあい、とけあって、喧がりではほとんどどれがどれとわからないまでに壁や戸の区別がつかなかった。またしてもむらむらとした湿疹部だ。ぼろぼろの古帯みたいな道が気まぐれにわかれたかと思うとくっつき、くっついたかと思うとわかれ、豚や鶏がけたたましい声で鳴きながら平気で家のなかへかけこんでいくところを見れば、人間が床ももたずに彼らと親交をかわしているらしい気配がはっきりのみこめた。どの家も、たとえばひとりの男がドッとかけだしてぶつかればマッチ棒ほどの抵抗もできずにひとたまりもなくつぶれてしまうかと思われた。屋根にはスレートのかけらや、やぶれた波型トタンをならべ、風にとばないように石をしこたまのせているが、家そのものの頼りなさから見れば、防禦物のはずの石がげんに最大の攻撃物となって、寝ている人間の頭をジロジロ狙っているようだった。戸や壁からは酸性で粘液質の異臭がたちのぼり、この部落の住人の汗や尿は、いったい土のなかのどの層まで浸透したのだろうかと思わせられた。そのあわれな腫物のような家と暗がりのあちこちでは赤ン坊の泣声や老人のつぶやき、女の叫び、男の笑声などが聞こえ、ある放埒さを発散していた。フクスケは歩いてゆくにしたがって、こうもりのように小屋のまわりをかすめる、まるでごみ屑のかたまりに肺とのどをつけたような子供の群れや、ほとんど全裸にちかい恰好で道のまんなかにたおれている男などを見た。男は前後不覚に酔っぱらって粘土のようにくろぐろとよこたわり、ひと嗅ぎでそれとわかる、虹のようなキムチとマッカリの匂いを全身から発散させていた。フクスケをつれてきた女は、その男をよけてとおりながら

「えらい甲斐性持ちやがな」

とつぶやいたが、その口ぶりには、ひやかしと讃嘆と

呆れがまじっていた。
「こらア、相当なもんや」
あたりを見まわしてフクスケがぼんやりつぶやくと、女はきめつけるように
「アバッチ部落やがな」
いかにも知らないのを軽蔑した口ぶりでいったが、早口なのでフクスケには聞きとれなかった。
女はフクスケをつれて薄暗い古帯のなかをあちらへくぐったり、こちらへでたりしながら歩きまわったあげく、一軒の家のまえへでた。その家はまわりのかさぶたのなかでもかなり大きいほうで、二階建てであった。が、よろよろとみすぼらしいことはおっつかっつで、各関節がはずれかかっていびつになっていることは、夜目でもはっきり平行四辺形にゆがんだその恰好で、それと知れた。女はフクスケを道に待たせておいて、家のなかへ入っていき、土間で大きな声をあげた。
「雑魚つれてきたでえ」
その陽気さと口汚なさにフクスケはいささかたじろいだが、いまさらひきかえすこともできないので、女が戸口から平目のような顔をだして叱るように
「早よ入りいな」
といったときは、自棄半分にずかずかと入っていった。家のなかでは五、六人の大男が洗面器に牛の臓物を入れ、七輪をパタパタあおいでトンチャンを食っているさいちゅうだが、フクスケが塵芥箱をかつぎこむようにして全身を裸電球のしたにあらわすと、いっせいに反応が起った。めっかち、ふんどし、若僧、ステテコ。恰好はちがうがいずれも二頭筋を露出せんばかりにたくましい男たちは、洗面器から顔をあげ、フクスケを見て呆れたようにだまりこんだ。フクスケは彼らの表情を見て、それ見たことか、と思い、ぼんやり土間にたたずんで頭をかいた。蓬髪のなかから彼が手をひきだすと、長い爪には灰いろのあぶらがいっぱいつまっていた。男たちはだまって顔を見あわせた。が、一座のなかでもどうやら親分と思える、禿げ頭の酔っぱらいが、おかゆのようなマッカリのどんぶり鉢を畳のうえへおいて、口のあたりをぬぐいつつ、ゆっくりした口ぶりで
「なんや、こう、まるでどんどろ大師みたいな奴ちゃないか」
といったので、男たちはゲラゲラ笑いだし、箸をとりなおして洗面器のなかをつつきさがすことにもどった。彼らは、そうなると、フクスケのことなどすっかり忘れたように赤や紫の血の泡のなかをかきまわすことに夢中の様子であった。禿げ頭の酔っぱらいはもうひとくちマッカリをあおってからたちあがり、押入れを足で蹴りあけて

「早よう着かえてトンチャン食うたら、どや」
といいつつ、フクスケのところへ、ズボンとシャツを湿ったするめみたいに投げた。いずれも機械油や赤錆でよごれきっていたが、いまのフクスケにしてみれば第一礼装とまではいかないにしても、まずありがたいものであった。禿げ頭の酔っぱらいは押入れをしめるとふたたび洗面器とどんぶり鉢にもどり、フクスケにそれ以上なにも説明しようとしなかった。ほかの男たちもがやがや騒ぎながら食うことにかかりきっていて、フクスケの名前や、経歴や、どこからどうして来たのか、これからどういう仕事をするのか、なにひとつ聞いたり説明したりしようとせず、もっぱら愉快にやっていた。ただ、途中で一度、フクスケが薄暗い土間でむこうむきになってズボンをはこうと素裸になったとき、めっかちの男が七輪から顔をあげ
「オ、おっさん、かたキンかあ」
といったが、これはフクスケがひるむすきもなくべつの男が
「そういうおまえは片目やないか！」
ときめつけてくれたので、そのままになった。台所へ消えたのか、気がつくといつのまにか女はいなくなっていた。
フクスケが部落へつれこまれたのは夜の八時頃であったが、それから二時間ほどしてから彼は妙なところへ行って妙な仕事をした。部落を出発するとき、彼は道具をあたえられただけで、なんの説明も聞かされなかった。禿げ頭は
「掘れいわれたとこを掘ったらええのや」
といったきりだったし、ほかの男たちもニヤニヤ笑うだけで、なにもいってくれなかった。のみならず、洗面器や七輪をまえにしているときはがやがや騒いで、臓物や、タレにするニンニク汁の品評などにふけっていたのに、さあ出発となると、男たちはピタリとだまってしまい、顔や筋肉のゼンマイを一触即発のギリギリに巻きしぼって行動したので、フクスケは這いこむすきがなく、なにがなにやらわからないままに彼らのうしろについてまわるだけだった。翌朝になるまで彼は自分がどんなところにいたのか、まったくわからなかった。
男たちは服を着かえたフクスケをまじえてしばらく円座になって臓物を食っていたが、そのうちに時計の針が九時半をすぎると、食うのをやめ、一人、二人とたちあがって二階へいき、服装をととのえておりてきた。いずれもズボンはよれよれだが黒か茶で、シャツもそんな色のものを選び、ひとりも白シャツを着ているものがないことにフクスケは気がついた。どこからともなくべつの男たちが外から入ってきて一団に加わったが、やはりこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook